様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　7　月　7　日現在

機関番号：31302
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006　～　2008
課題番号：18530541
研究課題名（和文）　慢性疾患を持つ子どもの「語り」にみる sense of coherence

研究課題名（英文）　Sense of coherence and illness narrative in children with chronic illness

研究代表者
堀毛　裕子（HORIKE HIROKO）
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号：90209297

研究成果の概要（和文）：辛い体験を乗り越える人間のポジティヴな力ともいうべき首尾一貫感覚（sense of coherence；SOC）が、慢性疾患を抱える子どもの病気体験に関する「語り」においてどのように見出されるかについて、内容の質的分析と尺度等による数量的分析という二つの側面から検討した。量的把握のためには、新たに日本語版子ども用 SOC 尺度を作成し、信頼性・妥当性の確認を行った。また、あわせて成人に対する調査も実施し、健康心理学領域における SOC 概念の有効性について検討した。

研究成果の概要（英文）：”Sense of coherence(SOC)” is one of the key concepts in health psychology. SOC is a global orientation that express the extent to which one has a pervasive, enduring though dynamic feeling of confident. This study showed that relationships between the quantitative data of SOC and qualitative data of illness narratives in children with chronic illness.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2006 年度 | 1,300,000 | 0 | 1,300,000 |
| 2007 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2008 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,900,000 | 480,000 | 3,380,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：病気の語り、sense of coherence、慢性疾患、子ども、健康心理学

## １．研究開始当初の背景

心身の疾患に対する心理学的理解や援助のためには、疾病（disease）だけではなく、個人の主観的な病気経験（illness）を扱うことが重要と考える。筆者は、このような視点から、特に個人の語り（narrative）に着目して研究を継続する中で、成人の病気体験に見られるポジティヴな意味づけを理解する枠組みとして、sense of coherence（SOC）の概念に着目してきた。

Sense of coherenceに関する研究は、近年のポジティヴ心理学の流れの一つと位置づけることもできよう。しかしこのsense of coherenceに関して、日本の健康心理学領域での研究はまだ多くはなく、その形成や発達に関する研究はさらに乏しい。Sense of coherenceの発達と形成を検討することは、慢性疾患を抱える子どもたちのストレス対処能力を高め適応を改善していく上で、有効なものと考えられる。また、病気体験の語りに見られるsense of coherenceを検討

することは、健康心理学における研究と実践の両面にとって意義のあることと考える。

## ２．研究の目的

子どもの病気体験に関する語りにおいてSOCがどのように見出されるかを、質的・量的な二側面から検討することにより、病気の主観的体験と人間のポジティヴな力について多面的に検証する。

## ３．研究の方法

慢性疾患を持つ子どもを対象に、sense of coherence に着目しながら、病気体験の語りについて、質的な分析を行うこととともに、量的な分析を行う。すなわち、面接と質問紙調査の双方を行い、それらに現れる sense of coherence と病気の語りについて検討する。

Sense of coherence の量的な把握のためには、日本語版子ども用尺度の開発が必要である。この尺度は、基本となる成人用尺度があるため、並行して成人を対象とする調査も行い、本研究の基本となる sense of coherence の概念や尺度についてさらに検討を加える。

## ４．研究成果

3 年間の調査で得られた各種質問紙への回答や病気体験についての語りは膨大なデータ量であり、内容的にも多岐にわたっている。協力いただいた対象者のためにも、それらを十二分に検討しつくすことが必要であるが、特に語りの質的分析などについては、まだ満足のいくところまで到達したようには思えない。しかしながらまた、研究上のデータそのものとは別に、本研究課題を通じて sense of coherence に関わる検討を深めていく中で、関連研究者に呼びかけて学会でのシンポジウムを企画運営し、また関連する内容について原稿をまとめるなど、広い意味で研究の成果を得、さらにそれを還元する作業もなしえている。

ここでは紙数も限られるため、特に量的な検討を中心に、いくつかの代表的な知見をまとめる。

### (1) 日本語版子ども用 SOC 尺度の作成

本研究において、sense of coherence を量的に把握するためには、まず測定する道具としての適切な尺度を開発することが必要であった。幸いに、健康生成論や sense of coherence 概念に関する研究を行う中で、その提唱者である Antonovsky のかつての同僚であり、子どもを対象とした sense of coherence 尺度を開発した Dr. Margalit（ヘブライ大学）の知己を得て、子ども用尺度の日本語翻訳版の作成と使用の許可を得ることができた。

原版では、対象年齢によって 5-10 歳用と思春期用とが分かれていたが、内容が共通していることや、また日本での実施の現状などを考慮して、小・中学生用としての日本語版子ども用 SOC 尺度を作成した。

翻訳の過程では、国外の研究者の協力も得て英・日の質問文の対応について充分な検討を行い、また成人用尺度との対応も視野に入れつつ、最終的な項目を確定した。因子構造の確認のほか、ハーディネス等との規準関連妥当性やアルファ係数による信頼性の確認を行っている。

SOC とハーディネスの相関

| SOC<br>ﾊｰﾃﾞｨﾈｽ | 処理<br>可能感 | 有意味<br>感 | 理解<br>可能感 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| ﾁｬﾚﾝｼﾞ | .207** | .564** | .402** | .518** |
| ｺﾝﾄﾛｰﾙ | .349** | .187** | .023 | .300** |
| ｺﾐｯﾄﾒﾝﾄ | .324** | .489** | .290** | .518** |

完成した尺度は、ダミー3 項目を含む 19 項目に対し 4 段階評定を求めるものである。

（例）

「私が毎日していることは、楽しいです」

「私は、自分の問題を解決することができます」

### (2) 小・中学生における SOC の発達

新たに作成した日本語版子ども用 SOC 尺度を用いて、小学校 4 年生～6 年生と中学校 1 年生～3 年生を対象とする調査を行い、これら 6 つの学年間での SOC 尺度得点を検討した。

SOC 得点の 6 学年間比較

| 尺度得点 | *F*値 | 有意性 |
|---|---|---|
| 処理可能感 | $F(5/542)=7.714$ | $p<.001$ |
| 有意味感 | $F(5/545)=7.587$ | $p<.001$ |
| 理解可能感 | $F(5/557)=1.138$ | *n. s.* |
| SOC 合計点 | $F(5/522)=6.370$ | $p<.001$ |

上の表に示した通り、SOC の得点について小学 4 年生から中学 3 年生までの 6 学年を比

較すると、自分はものごとにうまく対処できるという対処可能感は、小学校では学年と共に上昇するものの、中学校では低下する。また、日々の生活にやりがい・生きがいを感じる程度を示す有意味感は、学年が上がるにつれてしだいに低下していた。他方、周囲の状況を安定し秩序だったものと捉える程度を示す理解可能感は、学年間であまり差異は見られなかった。

全体を眺めれば、生活世界とそれに関わる自分のあり方についてのポジティヴな捉え方は、小学校から中学校への学年の上昇と共に失われていくように見える。

一般的には、SOC は経験と共に増加していくものであり、また他方、根拠のない幼児的な万能感は、様々な経験をするうちに年齢と共に低下していくと考えられる。また Antonovsky は、思春期の様々な変化や体験がそれまでの高い SOC の基盤を揺さぶる可能性があることを指摘している。

その意味では、小学 4 年生から中学 3 年生にかけての各尺度値の低下は、幼児的な万能感が消えて、より現実を意識していくという意味での、正常な発達の経過を示しているものと考えられる。また特に、調査時期が 3 月であったことにより、特に高校受験を通して現実の厳しい状況に直面している中学 3 年生は、一時的にも、もっとも SOC が低下している状態にあったと思われる。

いずれの学年においても、SOC 得点に性差は見られず、従来の研究結果と一致していた。

(3) 成人における患者と一般の SOC

先に示したとおり、本研究では sense of coherence という概念自体についても検討を深めることを課題の一つとしていた。

そのため、子ども用尺度の開発とともに、成人用尺度の因子構造の検討や、成人の乳がん患者と健常者を対象として、SOC と関連概念との関係を検討するなどの調査も行っている。

ここでは、年齢をマッチングした乳がん患者と一般の女性についての、SOC 得点の比較を示す。患者群の SOC 合計点は一般群より高い傾向を示し、また対人的信頼が有意に高かった（成人用尺度は、今回のデータでは意図されたものとは因子構造が異なり、3 つの下位尺度のうち処理可能感が抽出されず、対人的信頼の因子が見いだされている）。

また、ハーディネスや Locus of control など SOC と関連する特性と SOC との相関を見ると、関連のありようは 2 群で様相が異なっていた。尺度得点の背後に想定される認知的枠組みや対処姿勢などに、一般群と患者群で違いのあることが推測される。

患者群と健常群における SOC 得点比較

| | 一般 ($n$=210) | 患者 ($n$=50) | $t$ 値 | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|
| SOC 合計 | 49.91 | 52.56 | -1.94 | $p$=.054 |
| 理解可能感 | 23.61 | 24.27 | -0.76 | *n.s.* |
| 有意味感 | 19.39 | 19.34 | 0.09 | *n.s.* |
| 対人的信頼 | 6.90 | 8.71 | -4.28 | $p$<.001 |

(4) 病気の語りにおける言葉の使用と SOC

病気体験の語りについては、質的な分析と量的な分析とを行っているが、ここでは成人の病気体験についての語りに関する量的な分析について報告する。

50 名の乳がんの病気体験の語りについて、すべての言葉を単語レベルに分割し、ワードマイニングにより、言葉の出現頻度に着目した。別に得ていた SOC 尺度得点から SOC 得点の高・低 2 群に分割し、それぞれの群で病気の語りにおいて用いられる頻度の高い言葉を比較した。

SOC 合計得点においても、また SOC 各下位尺度得点においても、SOC の高・低によって、病気の語りにおいて多く用いられる言葉は統計的に有意に異なっていることが確認された。SOC が高い人々は、前向きで積極的な対処を反映するかのように、病気体験の語りにおいても「サポート」「感謝」「心」といった言葉を多く用いていた。それに対し、SOC の低い人々は、「放射線治療」「病院」「不安」「医師」「看護師」といった、彼女たちが実際に直面する問題に関わる言葉が有意に多く用いられていた。

SOC の高低により、世界をどのようにとらえるかといった Antonovsky のいう「生活世界への志向性」が異なっており、それがまた、病気という体験をとらえるやり方に反映されて、語りにおいて用いられる言葉も異なってくるものと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 6 件）

① 堀毛裕子　健康心理学における sense of coherence の応用可能性を探る（シンポジウムの企画と司会、同名タイトルの話題提供）　日本健康心理学会第 22 回大会 2009 年 9 月 8 日　（早稲田大学）

② 堀毛裕子　乳がん患者の語りと健康生成論（ワークショップ「サイコオンコロジー(6)-がん患者,遺族,および医療者の感情反応と精神的健康」における話題提供）日本心理学会第 73 回大会　2009 年 8 月 28 日　（立命館大学）
③ 堀毛裕子　子ども用 sense of coherence 尺度日本語翻訳版の作成-因子構造と信頼性･妥当性の検討-　日本心理学会第 73 回大会　2009 年 8 月 26 日　（立命館大学）
④ 堀毛裕子・堀毛一也　成人用 sense of coherence 尺度短縮版の因子的妥当性・基準関連妥当性に関する検討　日本心理学会第 72 回大会　2008 年 9 月 20 日（北海道大学）
⑤ 堀毛裕子　乳がん患者の sense of coherence に関する量的検討－一般成人との比較および類似概念との関連－　日本健康心理学会第 21 回大会　2008 年 9 月 12 日　（桜美林大学）
⑥ Hiroko Horike　Sense of coherence and illness experience-SOC scores and the text mining of illness narratives-　X X IX International Congress of Psychology July, 21,2008　（Berlin, Germany）

〔図書〕（計 2 件）

① 堀毛裕子　2010　ポジティブ心理学と健康　堀毛一也（編）　ポジティブ心理学の展開（現代のエスプリ 512）　ぎょうせい　176-187.
② 堀毛裕子　2009　自己と世界のポジティブな認知に向けて　白崎けい子（編）学童期のメンタルヘルス（現代のエスプリ 503）　ぎょうせい　86-95.

６．研究組織

(1)研究代表者
堀毛　裕子（HORIKE HIROKO）
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号：90209297